「やまとことば」二種について：近世語研究（その十）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 深井, 一郎 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/20207

「やまとことば」二種について

――近世語研究（十）――

深井一郎

はじめに

「やまとことば」という語は、一般に次の三つの意味で用いられている。[註1]①わが国本来の言葉。日本語。②日本の歌。和歌。③近世において、中古語や女房詞などの混じた一種の雅語をいう。表題にいう「やまとことば」は勿論書名であるが、その由来は、右に掲げた第③の意味に基くものと考えられる。詳しくは、本論において「やまとことば」二種の内容を検討する中で改めて考えてみよう。

「やまとことば」という書名を持つ書物に付いては、「国書総目録」によれば、写本・刊本を含めて随分と多種多様なものが存するようである。まず写本として、静嘉堂蔵ほか三本が記されている。刊本としては、元和寛永古活字版・延宝九・元禄九・享保十・享保十一・宝暦二・宝暦六・寛政四・寛政十一・天保二・嘉永七・刊年不明と、十二種類の版が存するようである。また各版本の現存するものも数点以上に及ぶようである。刊年不明のものは十三点にも及ぶ現存の本が挙げられているが、恐らく一種類ではないであろう。これに次いでは延宝四と享保十一の各八点の所在が示されている。又、書名も「増補大和言葉」「やまと詞大成」「大和詞」「新板大和詞大全」「新増大和詞大成」「増補大和詞大成」「増補大和詞」「考訂やまと詞」などさまざまである。なお「別に大和歌詞」「大和詞大成」の見出し項目も存する。

次いで、ここに紹介する二本について解説しよう。

㈠「新板やまとことは」　無刊記。（架蔵）A本と呼ぶ。

㈡「やまと詞」　享保十一年刊。（架蔵）　B本と呼ぶ。

㈠A本は丹表紙、茶絹糸で綴じ、題簽は「やまとことは」、いずれも原装のままである。寸法は、縦二〇・二糎、横一四糎、題簽は縦一四・六糎、横三糎、子持枠である。丁数は十七丁、総裏打が施されている。柱刻は一～十七。内題は第一丁表に二行分に「やまとことは」とある。本文は内界線を施し、その寸法は縦十六・八糎、横十二・八糎である。各丁表裏とも十一行、上下に分ち、上段に大和言葉を記し、下段に解説と見られる内容を記している。掲げられた項目は二七九項である。中には重復するものも見られる。その證歌と見られる歌が三一首記されている。最終丁の最後

の行に「やまと言葉おわり」の文字が記されている。刊記はないが、近世ごく初期刊と思われる。

㈡B本は青表紙、白綿糸で綴じ、題簽は「やまと詞」、右上肩に「享保刊本」と朱書、左横に「附世話字尽」と墨の同筆、白紙であり、是は後の補修と思われる。寸法は、縦十五・八糎、横十一・四糎、題簽は縦六・六糎、横二・五糎である。丁数は六五丁。内題は「増補大和言葉」とあり、その前に序文を有する。本文は内界線を施し、その寸法は縦十二糎、横九・二糎である。各丁は十行、上下に分ち、上段に大和言葉を記し、下段に解説と見られる内容を記している。配列はいろは順としており、A本の特に明らかな配列基準を見せないのと対照的である。掲げられた項目は八一二項目である。この中にA本に記載された二七九項は十五項を除いて総て収録され、概ねいろは別の各部の頭初に記載されている。ほかに證歌六八首が収められている。この「増補大和言葉」の後に「恋の詞　付合」九丁と、「世話字尽」六丁が収められ、末尾に「享保十一丙午年八月吉日　寺町通松原上ル町　菱屋治兵衛板」と奥書がある。

ついでA本とB本との相違を述べれば、収録項目がA本二七九、B本七〇四、證歌はA本三一首、B本六八首であり、収録項目ではA本の中十五項がB本で姿を消し、新たに五四八項が増補され、證歌ではA本の三一首すべてがB本にも収められている。AB両本に共通の項目において次のような異同が幾つか見られる。

◇いまちの（・）月とハ　十八日の月（夜）を申也（いふ）
◇はうこふ（らから）とハ　をとゝひをいふ（の事也）
◇はなたのおび（帯）とハ　おなしこゝろ（心）をいふ
〔本文はA本による。右傍線の部分がB本では（　）内となっている〕

第一例程度の異同は例が多い。第二例は意味不明の語「はうこふ」を「はらから」と解釈して訂正したものであろう。第三例はA本において「はなのいろころもとハ　うつろひやすきを言」の項の次に記されており、「おなしこゝろ」とは前項の「うつろひやすきを言」を指示すると見れば、移ろひ易きものの譬に用いられる「はなだのおび」に対する解説として妥当となる。ところがB本では、これの前項は「はなかつミとハ　まこもくさをいふ」となっているために、A本の指示を流用することは不可能となっている。もっともA本にあっても、前項の解説を受けた解説は他に例を見ないものであるが、一応の説明は付くものである。

因みにA本に在ってB本に収められなかった項を掲げよう。

◇はゝ木ゞとは　よそに見てあハぬをいふ
◇おぎのうハかぜとハ　身にしむこひをいふ
◇たそかれどきとハ　ゆふぐれの事也
◇うつゝごゝろとは　すそはづれたるを言
◇のなかのしみづとハ　たえ〳〵なるをゆふ
◇くさまくらとは　たびねをいふ
◇ふしさはとは　物にこりたる事を言
◇ふゆのたとは　たのみなきを言
◇こちふくかぜとは　身にしむをいふ
註2
◇ことしげしとは　しばしまてといふ心
◇きよみがせきとハ　そでぬらすをいふ
◇しかまのかちんとは　あひそめなる事をいふ
◇しかまのかちんとハ　あひそめていろますを言
◇しきのすゝきとハ　こひそめたるをいふ
◇もしほのけふりとハ　たえぬ思ひにくゆるをいふ

やまとことば

「やまとことば」AB二本に収録された八二七項目について、上段と下段とに分けて挙げられた各項の記述の性質を検討する。一応、①語義解釈　②異名　③枕詞　④女房詞　⑤誤解・その他　⑥古歌による連接　⑦意味・関連不明　の七区分によって検討を進めることにする。「……とは」と提示して「……なり」と解説する方式は、古来語句に対する注釈の在り方として基本的なものである。

①　語義解釈

全項目の四割を超す三三七項が、このもっとも一般的な語義解釈という分類に入ると見られる。いま行う分類の方法が、②から⑦まで比較的特徴のある性質を採りあげて、それらに属しにくい一般的なものを、包括的に「語義解釈」として扱うという仕方で進めた結果であるから、この分類に入るものは、特徴的な性質の見られない項目ということになるわけである。しかし、この分類に入る総数が40％という数値を示していることは、上段に示された語句に対して、下段に記された内容が、一般的に「解釈」と言われるものの平均的な性質をもつものであると言うことができる。

この一般的に「解釈」という性質を持つ項目を、あえて更に分けて見るならば、上代語と覚しきもの四四項、中古和歌の用語と見うるもの六一項、近代語かと思われるもの二三項、その他（多く中古散文の用語か）二〇九項となる。いま、それぞれについていくらかの具体例を挙げよう。〔（　）に意味を表す漢語を当てた。下段の上部○印はA本に在ることを示す。以下同じ。〕

〈上代語と覚しきもの〉

◇いもせとハ（妹背）
◇はつたれとハ（初垂）
◇ほとろとハ（未明）
◇へつもとハ（辺藻）
◇とこつミかととハ（常御門）
◇ちりひちとハ（塵埃）
◇ぬなはとハ（蓴）
◇おにのしこくさとハ
◇わさおきとハ（俳優）
◇かぞいろとハ
◇たくなわとハ（拷縄）
◇れんじとハ（恋・練）
◇なだとハ（灘）
◇らうじとハ（領）
◇うつし心とハ
◇くだかけとハ
◇くだちとハ（降・斜）
◇山ひととハ（山人）
◇ますらおとハ
◇ゑくの若なとハ
◇あを人ぐさとハ（青人草）
◇さゝれ石とハ（細石）
◇みとのまくはいとハ
◇みとしろとハ
◇しきなミとハ（頻波）
◇しミゝとハ（繁）
◇ひつちとハ（稲孫）

○夫婦をいふ
始てしほやく事を言
天のひかりの事を言
海の草の事也
帝王の御在所也
すこしの事を言
水くさの事也
物わすれぬ事をいふ
天の岩戸の神楽の事也
父母の事也
あまのたぐるなわ也
ねんころなる事也
海河の落合也
わか物にする義也
狂乱なる事也
○にハとりの事也
よのふけゆく事也
仙人の事也
○かりする人をいふ
せりの事也
天が下いきとし生衆生事也
ちいさき石の事也
夫婦のちきり和合也
神の作らせ給ふ田也
しきりに立波也
しけきと言心也
かりたる田に又おふる稲を言

◇もこよふとハ（遙迤）　まとふ心也
◇せちミとハ（節忌）　しやうじんの事也
〈中古和歌の用語と見うるもの〉
◇いわをろすとハ　あミの事を言
◇いろなき人とハ　心なき人を言
◇はなのいろごろもとハ　○うつろひやすきを言
◇はつか夜とハ　○月なき事をいふ
◇にしきゞとハ（錦木）　○つれなきをいふ
◇ほにいつるとハ　物のあらハれ出るを言
◇とを山の花とハ　こひしき事を言
◇ちいろ海とハ　ふかきうミをいふ
◇ぬれぎぬとハ　○なき名のたつをいふ
◇おもひの玉とハ　しゆすの事を言
◇かたわれふぬとハ　○よるかたなきをいふ
◇かたいととハ（片糸）　○あハぬ事をいふ
◇たまがしハとハ（玉堅磐）　○いしを申なり
◇ついにゆくミちとハ　○わかれをいふ心也
◇なかれきとハ（流木）　流ざいの人を言
◇うた、心とハ（転心）　うつりやすきを言
◇うなひこことハ（髫髪児）　おさなき男女の事也
◇雲井のはしとハ　○かよひなきをいふ
◇まだきとハ（速）　はやくしる事を言
◇ふたしへとハ（二重）　二やうと言事也
◇恋すてふとハ　こひすると言心也
◇てもたゆくとハ（手懈）　手のたるき事也
◇あだ人とは　心たしかならぬ人也
◇あからめもせすとハ　よそめをせぬ事也
◇さくらたとハ（桜田）　さくらおほく有所也
◇きりたつ人とハ
◇ゆきあひのそらとハ
◇めならふとハ（目並）
◇身をしるあめとハ
◇しらあふぎとハ（白扇）
◇ひたちおびとハ（常陸帯）
◇も、しきとハ（百敷）
◇せミのは衣とハ
◇すみがま
〈近代語かと思われるもの〉
◇いさ、かけ舟とハ
◇いつさとハ
◇はにふの小屋とハ
◇ちまきのはしらとハ
◇おほろふねとハ
◇かさをりとハ（風折）
◇かつらの花とハ
◇そことハ（其方）
◇つるはじきとハ（弦弾）
◇つ、ミ井とハ
◇ふなよはひとハ（舟呼）
◇ことのはぐさ（言葉種）
◇あわびとハ
◇さはひこめとハ
◇人の日とハ
◇す、めの色時とハ
〈その他〉
◇いまちの月
○とをくゆく人をいふ　七夕の事也
見ならふ事也
○なミだをいふ
○なれんくやしき事
○ちぎりをむすぶ事を言
○だいりの事をいふ　うすき夏衣を言
○こがる、をいふ　ほかけ舟を言
出るさま也
いやしき家を言
まるはしらの事也
くちたる舟を言
かせをり烏帽子也
月の光の事也
人をさけしむ心也
ゆかけを言
春の若水の事也
舟からんとてよふ事也
こと葉のたねと言心也
○かたおもひをいふ　ゆきの事を言
正月七日の事を言
くれかたの時分也
○十八日の月を申也

◇いなつまとハ　○はかなき事をいふ
◇いさめとハ　いけんする事を言
◇いさりふねとハ　魚とる舟をいふ

最後の〈その他〉に属するものは数は多いが、最も平凡な「言い替え」によって、上段項を解説しているので、用例も、A・B本に存するもの、B本のみのもの各二例で、あとは略した。上代語・中古和歌用語・近代語と考えられる範囲で分類を試みたが、結果は特色を認めることはできないようである。近代語としたものの一部と〈その他〉の項目が比較的散文的な用語である。

② **異名**（古名も含む）

本文中「異名」の語を見るのは次[註3]のの四項のみである。

◇そりの花とハ　仙翁花の異名也
◇かざ見草とハ　柳の異名也
◇みきぐさとハ　もゝの異名也
◇きさらぎとハ　二月の異名也

一般に「異名」とは、別名とも言い、何らかの意味合をこめて用いる一般的名称と異なるものと解されている。また、辞書類でよく見受ける「異称」の語もあり、特に異った用法とも見られないが、官職名等に就いて用いられることが多いようである。一方「異名」の方は、植物・鳥・動物に多く、季節を表わす語にも多い。また「古名」は古き時代の名称の意として限定的に用いられる。本書の項目として、この仲間と考えうるもの約八八項、そのうち古名とされているもの十項を含むと見られる。上段・下段の記述のあり方は特に変化はない。いま若干用例をあげよう。

◇いすゝくれ月とハ（涼暮月）　六月の事也
◇はつ代草とハ（初代草）　正月の門松の事也
◇にほひ鳥とハ（匂鳥）　うくひすの事也
◇としこえくさとハ（年越草）　○むぎをいふ
◇ちゝろむしとハ　きり〳〵すの事也
◇ぬる玉とハ（寝玉）　ゆめをいふ
◇おやこ草とハ　ゆつりはの事を言
◇かりハらとハ（假童）　山伏の事を言也
◇よはた草とハ（夜半立草）　ほたるの事を言
◇玉花とハ　あられゆき也
◇そミかくだとハ（蘇民書札）　山伏の事也
◇ねさめ鳥とハ　にわとりの事也
◇六つの花とハ　ゆきをいふ
◇のこりぐさとハ　きくの花の事也
◇くきらとハ（狗耆羅）　ほとゝきすの事也
◇まつミぐさとハ　ふぢの花の事也
◇ふたはの紅葉とハ　いたどりの事也
◇ことひきくさとハ　○まつをいふ
◇てりさり（マヽ）とハ（照発草）　ほたんの事を言
◇さきくさとハ　ひのきの事を言
◇もとぐ（マヽ）さとハ（道求草）　卯の花の事を言
◇しらなみとハ（白浪）　○ぬす人をいふ
◇ひもす鳥とハ　からすの鳥を言
◇もゝちとりとハ　うくひすの事也
◇すゝのみことハ　さるの事也
◇とこなつとハ（常夏）　なてしこの事也（古名）
◇えひかづらとハ（蒲陶）　ぶとうの事也（古名）
◇あやめくさとハ　○しやうぶの事也
◇きゝすとハ　きじの鳥の事也
◇しない鳥とハ（鷽）　うの鳥の事也

これらを「異名」と判断したのは、それを多く収録している書

物、たとえば「蔵王集」「藻塩草」などによる。所載された項目の中、異名（古名を除く）と見うるもの七八項において、「蔵王集」に見るもの十一項、「古今打聞」八項、「藻塩草」「重訂本草綱目啓蒙」各七項、他には「和歌呉竹集」「和名抄」「大和本草」「奥儀抄」各三項を見ることができる。その他「至宝抄」「秘蔵抄」「俳諧歳時記」「莫伝抄」「風翮集」や「辞書類」を含めて三三項が考えられる。特定の書物に依拠したのではなかろうと見るべきであろう。

③ **枕詞**（歌枕も含む）

この類は、とくに説明を要しないであろう。総数二三項を数える。中、「歌枕」とされるもの四、「日葡辞書」で「詩歌語」とされるもの三が含まれる。以下すべての例を挙げる。

◇いわミかたと八（石見潟）　うらむと言心也
◇はなかたみと八　○かたらひをいふ心也
◇はくさと八（葉草）　こまかなる草を言　（詩歌語）
◇にしきゞと八　○つれなきをいふ　（詩歌語）
◇ときハの山と八　物のかハらぬ事を言　（歌枕）
◇ちハやふると八　久しき事を言
◇をしてると八（押照）　しほ海の事也
◇わかのうらと八　紀伊国の名所也　（歌枕）
◇たまほこと八　○ミちをいふ
◇たまくしげと八　○あかつきの事也
◇つらなるえだと八　○きやうだいをいふ　（詩歌語）
◇むもれぎと八[註4]　○人にしられぬをいふ
◇むはたまと八　○よるをいふ
◇くれはとりと八（呉服）　綾（アヤ）の事を言
◇あしひきと八　○山をいふ
◇あかねさすと八　○日のいづるをいふ
◇あづさゆみと八　○こゝろひくをいふ
◇あらかねと八（粗金）　つちの事也
◇あしかきと八（葦垣）　ちかき人あらぬ事也
◇あしかきと八　ちかき事也
◇さほしかと八　○たゝずむ事をいふ
◇宮城野と八　ふかき野也萩の名所也　（歌枕）
◇しめちかハらと八　天地人の事也　（歌枕）

最後の項目「標茅原」は歌枕とされるものであるが、下段の記載の意との関連は不明である。

④ **女房詞**

この類のものは総数三三項であり、元禄五年「女中詞」と重なるものが目につく。すべての例を挙げよう。

◇いねと八　あねをいふ　〈A〉
◇いもせとりと八　ほとゝきすの一名也　〈A〉
◇いわだおびと八　はらめる女の帯也　〈A〉
◇はひろ草と八　うりの事也　〈A〉
◇はなち髪と八　みたれ髪を言　〈B〉
◇ほそらと八　瓜の事を言　〈B〉
◇ぬきくさと八　あざ（麻）の一名也　〈A〉
◇おにつ（マヽ）わると八　○人のはらたつヲいふ　〈A〉
◇をもせいろと八　くれなゐ染の事也　〈A・B〉
◇おましと八　さしきの事也　〈A〉
◇をたけると八　ねたき事也　〈A〉
◇かること八　鴨の事也　〈C〉
◇かゞ見草と八　大こんの事也　〈A〉
◇かほよはなと八　かきつはた也　〈A〉
◇かさしの草と八　あふひの事也　〈A〉

◇かざ見草とハ　柳の異名也　〈A〉
◇たそかれ草とハ　ゆふかほの事也　〈B〉
◇玉のいけとハ　硯の事を言　〈A・C〉
◇そゝくりとハ　手あそびの事也　〈A〉
◇つちのふでとハ　○つく〳〵しをいふ　〈A〉
◇ふしまち月とハ　○十九日の月を申也　〈A〉
◇ことぐさとハ　言葉の事也　〈A〉
◇衣うつすとハ　きぬた也　〈A・B〉
◇あさなとハ　あしたと言心也　〈A〉
◇あさゐとハ　あさねの事を言　〈C〉
◇みきぐさとハ（御酒草）　も、の異名也　〈A〉
◇しきたえとハ　○まくらをいふ　〈A〉
◇しまひこと八　何ニても菓子の名の事也
◇しろこ草とハ（註5）　いもの事又あやめ共言　〈A〉
◇もとゆひくさとハ　ちまきの事を言　〈C〉
◇もよひくさとハ　さくら花の事也　〈B〉
◇すか〳〵とハ　いそく心也　〈A・B〉
◇すゑつむ花とハ　くれなゐの事也　〈A〉

各項の下に記した符号Aは「女中詞」、Bは「女中言葉」、Cは「女中言葉づかひ」の各書を示す。僅かに二項目を除く以外は、すべて「女房詞」関係の書と重複している。又B本の増補部に大部分が含まれていることも特色の一であろう。

⑤　誤解・その他

◇いさなとりとハ（鯨取）　魚の惣名也　〈海浜灘への枕詞〉
◇にしき川とハ（錦川）　かつら川の事也　〈岩国川〉
◇ともちとりとハ（友千鳥）　ともたちの事を言　〈群千鳥〉
◇をしてるとハ（押照）　しほ海の事也　〈難波への枕詞〉
◇よろいくさとハ（鎧草）　ぼたんの事也　〈白芷〉
◇たばづけとハ（束付）　みたれたる髪也
◇つぼせんさいとハ（壺前栽）　源氏桐つほ一名也　〈前庭〉
◇なせとハ（汝兄）　弟（ラト、）也
◇らうたけとハ（薦更）　くるしき事也　〈いじらしい〉
◇むかしものとハ（昔物）　きのふといふ事也
◇うのはなとハ（卯の花）　五月節句也
◇くるしきうミとは（苦海）　世界をさして言也
◇雲の衣とハ　七夕の事也
◇ゆふたすきとハ（木綿襷）　しめなわの事を言
◇ミくりなわとハ（三稜草縄）　恋まちわふる事を言
◇しめちかハらとハ（標茅原）　天地人の事也
◇もみぢの月とハ（紅葉月）　十月の事也　〈九月〉
◇せつたとハ（雪駄ヵ）　下おとこの事を言

その理由は未詳だが比較的誤った理解による下段の解説を持つもの約三十項の中半数近くを右に例示した。下段の解説の後に、〈　〉に入れて記したものは上段項の通用の意味である。

次に誤りという程度ではなく、や、異なる解説を付したものが約二八項目見られる。その中約半数の例を次にあげる。

◇いひしろとハ（言争）　たがひにと言心也
◇はもとは（助詞は・も）　物をたつぬる心也
◇ほそとのとハ（細殿）　ろうかの事を言
◇そてまくらとハ（袖枕）　てまくらの事也
◇つくもかミとハ（九十九髪）　はけ物の事を言
◇ねんじハひとハ（念佗）　かんにんしたき事也
◇なてうとハ（何条）　なに事もいハぬ也
◇むねつちとハ（無熱池）　とそつ天の事也

◇うきくさとハ（萍）　わかれたる事也
◇のされのたかとハ（野晒鷹）　冬のとやのたか也
◇八雲立とハ　三十一文字の哥を言
◇あまかつとハ（天兒）　おとこの子二才斗の事也
◇もゝこいけとハ（百子池）　七夕にさゝけ物也
◇せりつむとハ（芹摘）[註6]　恋するを言

右に掲げた「誤解」及び「やゝ異なる解説」と見られるものとは全く性質を異にするものだが、「その他」として、便宜上、同一の分類項目とした。これに属するものは十三項である。

〈助詞・助動詞を掲げたもの〉
◇はもとハ　物をたつぬる心也　（既出）
◇けらしとハ　けりといふ事也
◇めりとハ　なりのかへ詞也

〈漢語を和語で解説〉
◇かんきよとハ（閑居）　ものしつかなる所也
◇れんよするとハ（輦輿）　てくるまの事也
◇れんじとは（恋・練）　ねんころなる事也　（既出）
◇きゝうとハ（危急）　いそく心也

〈和語風の語を漢語で解説〉
◇のりのすべらぎとハ　法皇の御事也
◇人の日とハ（人日）　正月七日の事を言　（既出）

〈音融合・方言・類推語・字謎〉
◇てふとハ[註7]　いふと同事也
◇わいたとハ[註8]　風の名也
◇ますらめとハ[註9]　女の事を言
◇人のためとハ[註10]　いつハりをいふ

此類の例はすべてB本増補部分のものである。

⑥ 古歌による連接

さきに、集中に證歌が六八首存することを述べた。この中、上段の記述と下段の解説のつながりが、その歌に拠ると見られるもの、つまり文字どおりの證歌と見られるものをまず挙げよう。

◇いなふねとハ　○いなにハあらずと言心也
〈もかみ川のほれはくたるいなふねのいなにハあらずこの月はかり　古今〉
◇はゝきゞとハ　○ありとはみえであハぬ事
〈そのハらやふせやにおふるはゝきゝのありとハみえてあハぬきミかな　新古今〉
◇立まふべくもなしとハ　○物おもふ事をいふ
〈物おもふにたちまふへくもあらぬ身のそてうちふりしこゝろしりきや　源氏　紅葉賀〉
◇まつの（た）ねとハ　○ねさせよといふ心なり
〈おもふことはまにまきし松のたねちよとちきらんいまハねさせよ　千載〉
◇ミねのしら雲とハ　○よそに見てすぐるをいふ
〈よそにのミ見てややミなんかつらきのたかまの山のミねのしらくも　新古今〉
◇ミわのやまとハ　○たづねてとへといふ心也
〈わが庵は三輪の山もとこひしくはとぶらひきませすきたてるかど　古今〉[註11]
◇しのふもぢすりとハ　○おもひミだるゝ事を言
〈ミちのくのしのふもちすり誰ゆへにみたれんと思ふ我ならなくに　古今〉
◇すミよしとハ　○まつもひさしといふ心
〈われミてもひさしくなりぬ住のえのきしのひめまついくよへぬらん　古今〉

右の八項目の上下のかかわりは、證歌によるものと考えてよい

であろう。これらすべてが、ＡＢ両本に存するものであることも興味ある事柄である。次に證歌と言っても差支えないかとも見られるが、少々上下のかかわりに寄与するところが弱いかと考えられるものをあげよう。

◇月のかつらとハ　　てにとられぬ事を言

〈めにはミて手にハとられぬ月のうちのかつらのこときミにそ有ける　伊勢物語〉

◇むかしのかたミとハ　　かきつはたを言

〈いひそめしむかしの宿のかきつはた色はかりこそかたミなりけれ　後撰〉

◇うつむ白雲とハ　　梅の花の事也

〈いろよりも香ハこきものハむめのはなかくれぬものをうつむ白雲　西行〉

◇のきばのくさとハ　　○人をわるく申心也

〈なにとかやしのふにはあらてふるさとのきはにしげるくさのなそうき　千載〉

◇ましばとハ　　雲のかすかなる心也

〈ましはたくけふりをこめて山もとのさとあるかたハ猶かすむなり　新続古今〉[註12]

右の二種類十三首を除けば、あとの五五首の大部分は、その歌の中に、上段の項目内の語が用いられているにすぎない歌か、さもなくば、全く関係の認められないもの等が記されている。総体として、掲げた項目の用例を含む歌と言いうるかもしれない。

本書の中で證歌をあげていない項目の中で、やはり、上段と下段の関係が「古歌」などに依ると考えられるものがある。こゝに掲げた「古歌による連接」とは、證歌をあげている項を含めて、一四七項目に対して付したものである。少々例をあげよう。

◇はまちどりとハ　　○あとを見る事をいふ

〈はま千鳥あとを見るにも袖ぬれて昔にかへる須磨の浦浪　続古今〉

◇おきこぐふねとハ　　○とまりさだめぬをいふ

〈与謝の海霞み渡れる明方におき漕ぐ舟のゆくへ知らずも　風雅〉

◇わくらバとハ　　○とふ人もなき事

〈わくらばに問ふ人あらばすまの浦に藻塩垂つゝわぶと答へよ　古今〉

◇よしのがハとハ　　○心ふかき事をいふ

〈あさき瀬ぞ浪は立つらむ吉野川ふかき心を君は知らずや　新拾遺〉

◇つまきとハ　　○ものにこりたるをいふ

〈今はとてつま木こるべき宿の松千世をば君となほ祈る哉　新古今〉

右の例に見る如く、證歌として掲げられた項目の上下関係と比較して差違は認めがたい。證歌として掲げられたものの中、単なる用例歌であるものや、それですらなく関係を見出すことが困難なものすら含まれていることを考えれば、「證歌」として掲げようとした意図は極めていい加減であると言うべきであろう。

いまこれら一四七項目の上下関係を保っている歌などを作品別に挙げておこう。作品名の下の数字は依拠した項目数である。

古今36　後撰9　拾遺6　後拾遺2　金葉4　詞花4　千載6　新古今14　新勅撰4　続後撰6　続古今7　続拾遺4　新後撰1　玉葉2　続千載4　続後拾遺2　風雅5　新千載3　新拾遺6　新後拾遺2　新続古今2　新葉2　夫木1　古今序1　古今六帖1　書紀1　万葉4　源氏2　伊勢2　狭衣1　平家1　曽我1　謡曲2

⑦　意味関連不明

本書に掲げる項目の中には、次に掲げるように、上段・下段のそれぞれの記載内容が、語としても意味不明であり、両者の関係も亦不明のものがある。例は次のとおりである。（波線は意味不明の語）

◇いななきゝとハ　○いなかをいふ
◇なこやとハ　○人のいるろうの事也
◇うちしきとハ　○いなかの事をいふ
◇こむまのハらとハ　○後くやしきをいふ
◇しばがきとハ　○かけどかゝれぬふミ也

さらに上下段の何れかの語句が意味不明であり、ために両者の関係の不詳となるものがある。例をすべて挙げよう。

◇いどしけしとハ　しはしまてと言心也
◇いぬきとハ　人の一名の事を言
◇いぬるついたちとハ　三月一日上ノ巳ノ日の事也
◇はかちくさとハ　冬の梅をいふ
◇とりころもとハ　つはくらの鳥を言
◇とものそめきとハ　さかしき事を言也
◇とこのちりとハ　とハれぬ事を言也
◇とこめとハ　水と石との事也
◇りやうひんとハ　からむしろの事を言
◇おもひ山とハ　○心のおくしらバやとの事
◇をりゑとハ　しけきと言心也
◇かせきはしとハ　○ふミ見るともあハじ也
◇かはく草とハ　梅の事也
◇かくハらとハ　竹の事也
◇よちつけとハ　はしめての事也
◇よふろとハ　禁内の下部也
◇たまくれとハ　○すだれをいふ
◇たまたる声とハ　なまりたる声也
◇たつさ草とハ　もみぢを言
◇そりの花とハ　仙翁花の異名也

◇袖のみむろとハ　神のいます所也
◇なくゝりとハ　わたの事也
◇なましの寺とハ　くらま寺の事也
◇うつゝごゝろとハ　○すそはづれたるを言
◇うたの女とハ　見ゝずの事を言
◇くずくとハ　ものかけくらきを言
◇山かハさととハ　○後くやしきをいふ
◇まがきいしとハ　○ふミへだつるをいふ
◇まつらかハとハ　○しほなき事をいふ
◇まんたるとハ　春夜の事也
◇まことやハらとハ　ふミの事也
◇ふしたけとハ　○たえぬおもひを申なり
◇ふぐろふとハ　あれたる家を言
◇ゑいかづらとハ　女のつくりかづら
◇ゑゝりとハ　もゝの花の事也
◇てうかとハ　六月土用の事也
◇てんのさけとハ　霜の事を言
◇あけくれなゐとハ　○こゝろなしといふ心也
◇きりにすむ鳥とハ　ほうわうの事也
◇きやうさつとハ　わさひおろしの事也
◇ゆきおの水とハ　ゆきへ水也
◇めざしとハ　いやしき女也
◇ミつのたまとハ　○つましきをいふ
◇ミつのすきとハ　○いろにいでぬをいふ
◇水にすむをしとハ　○ふたりあハんとの事也
◇見るはしの面とハ　すゞりの事を言
◇見きねとハ　六月はらへの事也
◇しきのすゝきとハ　○こひそめたるをいふ

◇しのすゝきとハ
○こひそめたるをいふ
◇しのゝめすゝきとハ
○ほのかに見えよといふ心
◇しとみのかぜとハ
○ゆふさりあハんとの事
◇しきの宮とハ
すミよしの宮也
◇しをり山とハ
冨士山の事を言
◇ひけミつとハ
○つゝむおもひをいふ
◇ひたいのかミしくとハ
恋する女の髪のちゝむ事也
◇ひとつもりとハ
雲の事を言
◇ひもずとハ
山がらの鳥也
◇もろはのかつらとハ
しほの事也
◇すりはり山とハ
○かなハぬ事をいふ
◇すかたのむしとハ
たぬきの事也

又、語義が不明というのではないが、上下段の関係が明らかでないものがある。例は次のとおりである。

◇いのちの水とハ（寿命）
なミたを言
◇はてなきとハ（果無）
一思するをいふ
◇わたつうミとハ
○すミよしのうらを言
◇かつら山とハ
○ほのかに見ゆる事を言
◇かつらの花衣とハ
せんにんの衣を言
◇かねくもるとハ
とをくなるを言
◇かたへ人とハ（片方人）
もろ〳〵の人也
◇たちふくかせとハ
身にしむを言
◇そとつもりとハ
雪の事也
◇つるのけごろもとハ
○しづかにあハんと言心
◇月よミの神とハ
春日明神の事也
◇なにのあしとハ註15
○あやうきいゑをいふ
◇なミのちきりとハ
とをき事也
◇なには寺とハ
天王寺也
◇うつむ白雲とハ
梅の花の事也
◇やまほとゝきすとハ
更衣を言
◇まさなぎとハ（正無ヵ）
つよくほめたる事を言
◇ゑにしとハ（縁）
○物ねたミする事をいふ
◇あハをか玉とハ（沫緒玉ヵ）
波うつ露の事也
◇さごろもとハ（狭衣）
○ゆめにだに見ぬをいふ
◇さくらの宮とハ
伊勢内宮の御事也
◇ゆるしでとハ（緩手）
ゆたん成事を言
◇めに見ぬ鳥とハ
蚊のまつけニ巣をかくる鳥也
◇ミをきとハ（見置）
帝王奉る食物の事也
◇しかふすのべとハ
○きミとねはやとの事也
◇ひとはしらの神とハ
かつらきの神の事也
◇ひかめの神とハ
天照太神の御事也
◇ものミ鳥とハ
さるの事を言

或は、当時よくしられた歌や諺、又は故事などがあったものかと思われるが、早急には探りえない。なお、これら以外に、何とか上下段項の連関を想定することはできるが、典拠としては認めがたい程度のものも若干存する。いくつか例をあげよう。

◇いりふねとハ
○いまにあハんといふ心
◇おいそのもりとハ
○はづかしき事をいふ
◇たなれ草とハ
扇の事を言
◇こし地とハ
○ふるさとのみちをいふ
◇さしかえ姫とハ
七夕の事也
◇せハものとハ
ちいさき魚の事也
◇すゑのまつ山とハ
○なミだいろうすきを言

以上、八二七項と證歌六八首について一通り述べてきた。あまり特徴らしいものも見られないが、一応こゝにまとめてみよう。〈語義解釈〉に属するものは全体の40％、その中で、上代語と覚

しきもの13％、中古和歌用語と見うるもの18％は予想されるところであるが、近代語と思われるもの6％は少ないように思われる。

〈異名〉に属するものは全体の10％強であるが、A本B本に共に存するものが僅か4項（4.5％）で、あとはB本における増補部分に含まれることは興味あるところである。また、本書中に「異名（古名）」の語は四項のみで、他の項は「……を言」「……の事也」の型で記載され、特に上段と下段の関係が「異名」であることを意識していない。

〈枕詞〉に属するものは全体の2.7％である。書中に「枕詞（歌枕）」などの用語は用いられていない。上段の「枕詞」に対して、下段にはその枕詞の懸る語が「語義」のように記されている。これも特に意識はされていないようである。総数23項の中、AB両本に存するもの11項、B本増補のもの12項と、ほぼ同数である。

〈女房詞〉これに属するものは3.9％である。既に述べたところであるが、「女中詞」「女中言葉」「女中言葉づかひ」に見られる語の採用が多い。上下段の記載の仕方は極めてよく似ているが、何れの書に依拠したかは断じえない。恐らくは、これらの書から既に採用され配列されたものからの転用かと考えられる。これに属する項目も、四例（12％）を除いて大部分が、B本増補部分に存する。

〈誤解〉これに属するものは7％であり、すべてB本増加部分に存する。〈その他〉に属するものは1.5％であり、これもすべてB本増加部分に存する。

〈古歌による連接〉これに属するものは18％である。明らかに證歌と言いうるものが判明するものは、AB両本に存するもののみである。なお證歌を収めている勅撰集は「古今」「新古今」「後撰」「続古今」「拾遺」「千載」「続後撰」「新拾遺」の八集で61％を占める。中でも「古今」「新古今」の二集は全体の34％を占めている。

〈意味関連不明〉これに属するものは15％強である。上段下段ともに不明の語を含むのはAB両本に共有するもののみである。また下段に不明の語を含む項目はB本には存しない。このことは、Aに比してB本が新しい時代の姿を反映していると考える材料となるであろう。

恋の詞　付合

〔B本51丁～59丁にあるものを鐫刻する〕

待佗るにハ　○床に涙のあまる　○灯のかすか　○いつかあハん　○更行鐘　○心うかる、　○八聲の鳥　○真木の戸さゝぬ　○身の程思ふ　○郭公　○出ぬ月　○旅のかへさ　○またさかぬ花

待佗しかりにもこかし秋の田のしのにをしなミ露もねられす

媒にハ　○文をかきやる　○賴よる　○うらむる　○舟のはやき　○海の水くし　○及ばぬ恋路　○見そめし俤などしられぬ心」

難面にハ　○数〳〵文を送る　○神にいのる　○いつかあハん　○涕かず〳〵　○恨のつもる　○涙ひまなき　○つきぬ恨　○きえぬ命　○はてなき思　○返しなき文　○中の関守　○聲せぬ時鳥　○出やらぬ月　○ふりずまの岡こりぬ事也

強面を昔にこりぬ心こそ人のつらきにそへてつらけれ

忍ふ思ひにハ　○かたちもやつる、　○よハる身　○袖のなミた　○おほけなき人　○昔　○いにしへ　○過し世　○をよバぬ中　○見し俤　○古郷」　○夢の餘波　○花の跡

忍ふれと色に出にけり我恋ハ物やおもふと人のとふまで

名のたつにハ　○媒を恨むる　○文を落す　○身もきえはてん　○あるにもあられぬ心など　○妬まる、　○只一夜の契り　○世にかしこき人　○あだし使　○いはけなき中　○こよひの月

逢事ハ玉のをバかり名の立ハ吉野の河のたきつせのこと

うらミのつもるにハ　○もの、けになる　○とハれぬ　○よそに契のかハる　○葛の葉のおつる　○涕　○たび〳〵送る文の返事なき　○そむき〳〵」○日比の思ひ　○強面　○なき名立る　○恵なき君　○あさき位　○わが身のおろか

逢事のたえてしなくハ中〳〵に人をもミをも恨さらまし

ちぎりをくにハ　○いはけなき中　○ちかひの文　○親さくる中　○ふかき思ひ　○あふせ　○待夕　○新枕　○おがむ仏　○人をたのむ心

契をきしさせもか露を命にて哀今年の秋もいぬめり

うきすくせにハ　○身を恨むる　○親のさかしら　○みどりの袖のちぎり　○おちぶる、中

妹がりにハ　○千鳥なく　○河風　○茅原」○有明　○心をつくす　○淀の河舟

思ひかね妹がりゆけハ冬の夜の川風寒ミ千鳥なくなり

恋しきにハ　○俤忘れぬ　○故郷　○いつかあハん　○都のかた遠き道　○捨し世をかへりミる　○ねられぬなど　○妻　○親　○友

いどせめて恋しき時ハうは玉のよるの衣をかへしてぞぬる

なげの情にハ　○一筆の文の返事　○おつるなミたかハく　○後の親　○うかれめ　○さすが　○忘れぬ中　○一夜の契　○旅の宿のあるし

あだし契にハ　○一夜バかり　○無人をこふる」○たハれめ　○夢覚る　○思ふもはかなき心　○偽　○消ん命　○悔しき　○頼ミなき中　○立名　○きゆる露　○ちる花

あたなりと名にこそたてれ桜花年にまれなる人も待けり

玉章をくるにハ　○見初て恋しき　○使を頼む　○鳫がね　○遠き旅の傳　○いはけなき使

見初るにハ　○俤忘れぬ　○簾のひま　○夢のほのか　○鞠の庭　○おほけなきなと

よそにミておらぬなけきハしけれとも名残悲しき花の夕陰

思ひわふるにハ　○身をやつす　○床ハなミだ」○なミだのかハくまもなき

恋わびぬあまのかるもにやどるてふ我から身をもくだきつる哉

垣間見にハ　○燈の影　○春日の里　○なまめく人　○はらから　○中河の宿　○碁　○老さきしる人　○思ひそむる　○花　○草花　○隣

物のけにハ　○行たえぬ　○うらミたき　○祈る　○なやむ　○馴し宿をはなる、　○小野にすむ　○舟の行やらぬ　○おつる涙

別にハ　○道ハ涙にくらき　○むなしきを送る　○旅のかどでをしたふ　○鳥が音　○鐘の音」○涕　○夢さむる　○短夜　○語り残す　○うかれめ　○有明の月　○命のきハ　○行舟　○横雲　○春の鳫　○道のちまた　○水の末　○糸　○因幡山

有明のつれなく見えし別より暁はかりうき物ハなし

きぬ〳〵にハ　○ゆふつけ鳥　○暁の鐘　○語り残す　○床に涙のあまる　○しの、めの空

東雲のほがら〳〵と明行ハをのかきぬ〳〵なるそ悲しき

頼よるにハ　○媒　○数ならぬ　○ときめく人　○契りの末　○ちかひし事　○君につかふる」○たより　○仏　○待文の返事　○占方

ちかおとりにハ　○媒の偽　○よもぎふの宿　○あだめく人　○悔しき契　○はかるる、使

ちかまさりにハ　○猶おもふ　○花の陰　○たづね來し花　○うつり香になる、　○情ある人　○哥の友　○あだならぬ心

語りよるにハ　○打とくる中　○老の友　○恨も残らぬ　○灯

の下　○雨夜　○品をさだむる
俤忘れぬにハ　○夢覚る　○写絵にむかふ」○なき親の跡したふ　○花の跡の雲　○夢　○かゝみ　○ふるきふすま　○こすの内　○焼香の烟
俤ハ忘れぬ斗かさねきて大ひえいつく高きふしのね
うとまるゝにハ　○恨のつもる　○身ハふりて　○独住　○落涙　○うき思ひ　○うき我身　○待人もなき夕
名のミ立してのたをさハけさそ鳴庵あまたにうとまれぬ共
人の偽にハ　○とハんとて來ぬ　○うらミかさなる　○かけはなる、中　○うき世　○うかれめ」
偽のなき世なりせハいかはかり人の言葉うれしからまし
あふ事あらぬにハ　○おもひのつもる　○糸竹のしらへのおろか
○君か恵ミを待わぶる　○時をえぬ　○かた糸
かた糸をかなたこなたによりかけてあハすハ何を玉のをにせん
名残をしたふにハ　○なミたせきあへぬ　○花のちる陰をさらぬ
○旅立ををくる　○けふはかりの春をおもふ　○藤衣をぬぎかふる　○別の袖　○夢人　○衣のうつり香　○君が俤　○歳の暮
○関送り　○今ハのきハ　○玉祭」○入月　○帰る鳫
親さくる中にハ　○たえ入思ひ　○あひおもふ　○心のまゝならぬ　○恨を、しこむる　○さの、舟橋
東路のさの、舟橋とりはなし親しさくれは妹にあハぬかし
いはけなき中にハ　○おやにしたかふ　○はぢらふ　○ゐづゝのかげなど
ぬれきぬにハ　○身をうらむる　○たハれ嶋　○露を分る袖　○髪をあらふ　○あか水をくむ
名にしおハゝあたにそ有へきたハれ嶋波のぬれ衣きると云なる
新枕にハ　○たゝならぬ　○たく香　○耻らふる心」○祝言　○三年を待　○いはけなきをおふし立る
あら玉の年のミとせを待わびて只こよひこそ新枕すれ
古き衾にハ　○わかれし跡　○独床に臥　○物思ふ夜半　○ねられぬ　○涕悲しき月　○夢
うしろめたきにハ　○へだてをく中　○故郷のたよりもなき　○仇なる人　○待夕　○いはけなき心　○頼ミし使　○女郎花　○夜の間の風
女郎花うしろめたくそ行過る男山にしたてりと思へ〔マヽ〕
なまめくにハ　○簾の内　○はらからなど
秋の野になまめきたてる女郎花あなかしかまし花も一とき」
色このむにハ　○袖の匂ひ　○簾の内　○忍びありき　○うとまるゝ人　○あだ人　○たのミかたき中　○物見車　○うすくこく書文
身じろくにハ　○すたれのおく　○袖のかほる　○衣のそらたき
めぐハせにハ　○簾のひま　○人めを忍ふ
世をうミのあまとし人を見るからにめくハせよ共頼まるゝ哉
うきさハりにハ　○待暮の雨　○忍ぶ夜の月　○月に雨花に風なとむすびて　○下す符にたかき岩かとなと　○ものいミ　○人のねたミ」○女の身の罪　○ねがふ後の世にのかれぬ妻や子の心
背〳〵にハ　○恨のある　○逢身を耻る　○まほならぬ心　○人めを思ふ　○何をかうとむ　○うしろめたき心　○灯の影
袖のうつり香にハ　○別ぬる跡　○俤忘れぬ　○花の下臥
○菊をつむ　○かたミの衣　○梅の花　○ならす扇　○あひミし中　○行過る小車　○なまめく人　○こすの内　○身じろき
下の帯にハ　○難面　○耻らふ　○生るゝを待」
忘るゝにハ　○あだし契　○あさきえにし　○さかしら　○はかなき誓　○色めく人　○老ぬる身　○たつ名はつかし
かよひぢにハ　○忍ふ人め　○露はらふ袖　○うき関守　○うかれ行　○妹かり　○小車　○ゆふやミ　○笛の音　○前わたり

○宇治の渡り　○賤が爪木　○はこぶ真柴

文にハ　○鴈がね　○旅なる人　○見し人恋る　○契

祈るにハ　○御祓川　○神　○かくるしらゆふ」　○法の師　○生る心　○うき人　○難面心　○物のけ　○物やミ　○ゆくゑしらぬ　○はつせ

さかしらにハ　○かけはなる、中　○あかぬ別　○うき親の心　○おかさぬつミ

なみだにハ　○立名　○うとまる、　○嬉しき　○記念の衣　○忍ふ故郷　○鹿　○鴈　○老の身　○罪うる身　○さすらへ　○うきすくせ　○藤衣　○なき跡　○うらミ　○なげき　○あハぬかへさ　○うき別　○はかなき契　○したふ別　○待よハる夜　○契あさき　○問來ぬ夜　○夢の名残」

使にハ　○文　○隔る中　○こぬ夜　○旅なる人

又中立にハ　○舟のはつ木中ニたてをく木也　○入江の水　○浦

夢にハ　○思ひね　○物思ふ枕　○無人　○旅ね　○待わぶる夜　○まれの逢せ　○忍ふむかし

うかれめにハ　○うき名　○もる、名　○三嶋江　○難波江　○濕衣　○旅の宿　○泊舟　○野上里

占かたにハ　○定ぬる契　○頼夕　○待旅人　○日をえらぶかどて　○あやうき命　○住かへん宿

世話字尽

〔B本60丁～65丁まで十行三段に配列されているものを飜刻する。〕

世風俗　滿遍　平形誦珠　公界　不忍　下配
早晩事　驟言　下當　浮事　私言　過怠
輕業　皆露形　千切　居城　浮雲　分野　終成物　本居　分知　催促附」　許立
外物　哆々〳〵　婆々〳〵　女童　諏合
流石　暇了

價等　挨拶　悶再　目近　諸有物
背語　迫付　自然　寸々切〳〵　正中　放氣物
愛垂　伏入　姥物　進疾奴　可愛　新
聲花　我任　破落々々〳〵　鳴霆　逐電　展物」
科云　節季候　求守　右往左往　賄賂人
自便　利　杈　椏々〳〵　呻軋　内扣
不屯ラス溜ラス　奔物　美旨　主麿答　餘祿取　峨々〳〵　上風
疫介　流行　嘘唏　濱物　自若、　時勢　爪棄物　吃　訛　「覗」　麋食　定癖
剪嘎　飄掌　南風　北風　伏脹面　身挺直

嘘著　嘘付　自付　姥物　寸々切　目近　正中　諸有物　放氣物　新
進疾奴　可愛　逐電　展物」　賄賂人
右往左往　内扣　上風　身挺直

嘸　形作　烘罟　蘂籥　皮裡附　如亀々々〳〵　羈打
苙奴　聊尔言　下便　十八種　悪忌
適ハ　浮虛　十千種
口号　臘　杯　何者　白灰　坦定」　灯花
邂逅　塘　遊〳〵　桃尻　邃　岌
端的　柿曹　檫　動堕々々　殿末　爪取」
苦蓋　東風西風　無比　後手遣　樂人　長今　谷風
賣女　仆者　天鵝絨　花糸　礼紙本ノ　寒垢離
落巨灰　一寸　欠氣　頻聞　瞋目　颯纏　宥人　天窓勝物　雪頽」
熟人　因嗷　啊娜　月丁　バクチ事　枕　肌合
親　鄙反　火熱　通欲　贋物　凶會日　自在、　軟弱　翠丸
悸目　輕人　不安定　丸雪　簀子　造鑿　無狀　様物　賑事
粗毛立　人　少見　心忪　行域　位奴
下僧　近間　飛　左之右之　奏物　魄取物

放射氣　水覆　下水　下月々々　寢徒者　姦出　所爲　寛綽
乍鯛　蠶豆　熟瓜　酢壺　食熟　錠豆　嬋媛　水蚤　曇物　嶌
咲噱　滕　皂葉　吠與々々　蒸　雄豆　慈姑　花表　晩稲　興米　壁錢　參差　鱗
爵　ウツハモノ　關木　篠目　鎮綜　的山　皂茨　破賦　日選　枯露柿　心嘈　遣曲
笂　熊川　東策　單衣物　試坂　河童　木泥ノ　魚目　獨樂　少人ノマハス
瓰々　躰者　劇　哽　酒直酒　然頭　咽　有犢ニ入　鰄　月額　凝者　凱歌ヽ
鐵漿女ノ　ハニ付レハクロ　方見」　水嚢　枝ハリモノニ用ユ　五月ノ　晩聽　入ハマリ
篠　戲氣者　枢機ヽクロヽハ片言也　徽カヒル　火雜　羅　莚戸ノ内ニトツク　銛刀ヲ　店屋物　占暴　蹂躙
嗔物食　擡　空心　叱　頬冠　倭厄者　王追手　玉輪戸　將　菝ノ　荅　眺　花
物怪　両邊　燕餅　破劈　媒介我　大語云　厥逆　靠　傳染」　左落葉
矮狗　生怕　兒　座牌　サジキノ　蹈鞴　嫂婷　桑門　異悪　今少　木栖弓
脂茶者　踢倒　饌子　斎々　膝行　奈　苛々　取障　滑々
卒度　浮々　眞平　冷咲　無左口作　強直　馬奴　角　睞　無ニ性根一
揺　下路々々　一能々々　井々　屑計」

仂強人　怕　総咸　平懐人云　遊山　弥上　津波　物色　全盛　風流　寸莎　壁
後宴モノビノ　渡御人　御傳母　通許　貝伽　遊恣ノメル　扶疎マハラナ　傃女空　磔

享保十一丙午年八月吉日
寺町通松原上ル町　菱屋治兵衛板」

おわりに

いまA本・B本を用いて「やまとことば」の内容を検討してきた。多数ある写本刊本を比較検討した上で、こゝに用いたA本とB本とを採り上げたのではない。たまたま所蔵していた二本、それも何時頃入手したかも記憶にないところを見ると三四十年以前に古書店を通じて手に入れたものである。A本が配列も整然とせず、今すでに不明となった語をもいくらか存しており、B本に比して明らかに古態を見せている。B本は項目のいろは別配列を行い、A本を含み（いくつかを抹消しているが）大増補を行い、更に「付合」「世話字」を多量に増加するという内容である。おそらく、A本に近世ごく初期の姿を見、B本に近世中期の様相を見ることは、必ずしも当を得ないことではあるまいと考える。

「やまとことば」という語の意味は、最初に予想したところでよいと思うが、改めて書名としてのそれが、当時の人々にとってどのように受けとめられたのか、言いかえれば、この書物は当時の人たちのどのような需要に応えたのかを一考してみよう。こゝでいう当時の人々とは、一定度の教養を身に付け、一応風流な遊びの中に身を置いた。所謂「文人」又はその周辺と考えてよいで

あろう。この書の内容のうち、「上代・中古の歌語や枕詞・歌枕」などは、和歌・連歌・俳諧にかかわる人々にとっては、必須の知識である。多くの歌集や歌語の詞寄せなどが近世全般に亙って出版されているのは、このことを物語っている。なお、これらは歌人や俳人の間に止まらず、風雅・上品という価値観と共に、生活にゆとりある町人層などにおいても身に付けたい教養として求められたことであろう。また、「女房詞」は、内裏・禁中から江戸大奥へ、さらに各地大名の奥向きへと拡がりながら、一般社会においても行儀見習と共に「女性の上品な言葉」として、身分の高いと自負する階層の女性層に憧憬の念を以て受け入れられた面もあったかと考えられる。元禄時代を中心にそれ以後にも「女中言葉」類の書がいくつか出版されていることでも、このことが理解できるであろう。ついで「異名」の類いであるが、一応は通常の名称に対して「異名」の方は、堅い文章や和歌・俳諧などの世界で上品な言葉（或は雅語の系譜に入るかもしれないが）として持てはやされたであろうし、その多識さが教養を欲する人士にとっては羨しいところであったであろう。以上のところが社会の需要として考えられるところであるが、内容の中にはやゝ行過ぎと思われる部分も見られるが、著者の衒気でもあろうか。付載された「付合」「世話字」も、書物の体裁や一貫性から見れば、そぐわないものであるが、知識を売るという風潮には合したと見うる。

なお、この論文の中に、大学院生、四十住基子・井口浩一・桜田千采・古川宗男と共に行った八八年後期国語学特別演習の成果を一部含んでいることを付記する。

註１　小学館刊・日本国語大辞典や岩波古語辞典などによる。日葡辞書にも「Yamatocotoba　ヤマトコトバ（大和言葉）日本の言葉」と記載している。

註２　此項、Ｂ本に「いどしけしとハ　しはしまてと言心也」とあり、「こ」と「い」の誤字かとも考えられる。

註３　此項、Ｂ本は「むは玉のすちとハ　髪の事也」とある。

註５　此項の下段の「又あやめ共言」に当る記載は「女中詞」にはない。

註６　集中、他に「一名」「かへ名」「かへ詞」の用語がある。

註６　同趣旨のもの「せりなつむとハ　○をよバぬこひの心也」の項がある。

註７　同趣旨のもの「恋すてふとハ　こひすると言心也」の項がある。

註８　日葡辞書に「ワイタ、北西の風、または、このほか基本方位（東西南北）の中の、二つの中間から吹く風のいずれをも言う。」とある。

註９　「ますらを」に対しては「たわやめ」の語がある。「ますらを」の「を」を「め」に改める類推による造語である。

註10　此項、Ｂ本は「人たのめとハ　いつハりを言」とある。「人」と「爲」を合して「偽」とする字謎が不明となり、「人頼め」……「うらぎられる・いつはり」と解説したかと考えられる。

註11　ＡＢ両本ともに、「ミわの明神御歌」として「こひしくハたつねてもこよわかやとのミわの山もとすきたてるかと」と記す。

註12　Ｂ本では「続古今」としている。Ａ本には不在。

註13　Ｂ本では下段「まれなる事也」となっている。

註14　此項、Ｂ本では「たまたれとハ」となっている。

註15　此項、Ｂ本は「なにはあしとハ」となっている。

付記　勉誠社昭和51年刊　近世文学資料類聚第二期の「古俳諧編47」巻末の加藤定彦氏解題に、諸本が詳細に記されている。十種類に分類され、更にその系統の諸本について述べられている。その中の「Ⅳ種中本十一行版」とされたものと、Ａ本が合致し、「永原屋版系統１」とされたものとＢ本が一致すると思われる。

平成元年九月十四日受理